

地縁のない子育て世代のママたちをサポート

根室管内中標津町 NPO法人子育てサポートネットる・る・る

人がいる、集まる、場所がある——。近くに知り合いのいない子育て世代の母親たちにとってそんな心強い言葉はないだろう。子育て支援ボランティア団体「NPO法人子育てサポートネットる・る・る」という名前の「る・る・る」はこの3つの言葉の語尾からとってつけられた。この団体は、酪農業が盛んな人口2万4000人ほどの中標津町にある。

代表の松實とよ実さんは釧路市で育ち、中標津町に嫁いだ。地縁のない中での子育てで苦労した自らの経験や、もともと保育士だったこともあり、子育て支援活動をしたいという強い思いがあったという。そんな中、中標津町で1998、1999年(平成10、11年)の2年連続で高校生による殺傷事件が起これ、母親たちに衝撃が走る。

「2年連続で殺傷事件が起こるこの町でこのまま子育てを続けていて大丈夫だろうか、このままではいけない」と児童委員や読み聞かせのサークルなど子育てに関わる活動をしていた母親たち7人が集まり、町長に依頼して教育の問題を住民全体で考えようと住民大会に参加した。

その後子育て支援ボランティア「ホットハンド」をつくり、この町の実態を調べるためにゼロ歳から高校生の子供をもつ保護者に対してアンケート調査を実施した。その時に回

答で一番多かったのがゼロ才児を持つ母親達の声。「中標津町は酪農業に関する営業所が多くて空港も近いことから、転勤族の若い夫婦が多く、その方たちの大半が私のように地縁はないけれど、初めてこの町で出産するというケースが多いことがわかりました。その時はまだ町は子育て支援の活動に積極的ではありませんでした」と松實さん。



築30年ほどの貸し事務所を改装したという活動拠点

このアンケート結果を受けて、初めて出産した母親と赤ん坊たちが集う「親子サロン」を作った。当時は児童館でサロンを開いていたが、町が子育て支援に取り組むことになり、一度は活動を中断した。しかし、「続けてほしい」と母親たちからの声が強くなりスーパーの2階の従業員の休憩室だった場所を使って続けることになった。そこでは子供を預けて買い物ができ、便利なことから利用者が増えていったが、手狭になったこともあって自分たちの拠点を自ら作ろうと場所探しをするこ

とに。松實さんの自宅は自動車を取り扱う会社を経営、敷地内にはもともとは築30年ほどの使っていなかった貸事務所があったため、そこを改築して2004年（平成16年）4月に施設をオープンさせた。

同年には親子サロンを皮切りに母乳相談室や鍼灸院が設けられるなど、産前産後の女性のケアにも先駆けて取り組んだ。こうした医療行為へのサポートができるように小児科の医師や産婦人科の医師が顧問となっている。産前産後ケアとして、足裏をマッサージするリフレクソロジー教室やフィットネス教室などもある。

広々とした自宅の敷地内には、駐車できるスペースも沢山あり、松實さんの実妹が経営するカフェもある。このカフェはエソ鹿肉を使った料理など低カロリーでヘルシーなメニューが好評というだけでなく、施設で働くスタッフや利用する母親たちが集うコミュニティスペースの役割も担っている。



親子でハロウィンパーティーを楽しむ

■ 働く場所にするためにNPO法人化

これ以外にも託児サービスをしたり、四季のイベントを企画したりするなど、ボランティア団体、サークル団体、個人事業のネットワークが多方面に築かれていった。それぞれの会同士では、連携を密にするために運営委員会を定期的を開いている。

2009年（平成21年）には「る・る・る」に集う個人事業主たちが産前産後の母親たちや赤ん坊の体のサポートケアをする「ママズケアそれいゆ」という別の団体を作り、近隣の市町村でカルチャースクールを開いたり、講演会などを行ったりしている。

このように様々な会ができたことで、事務処理や各団体との連絡調整が必要になったため、総務を担当するスタッフを雇うことになり、2011年3月NPO法人設立準備会を発足し、内閣府からの支援を受けて、2012年2月からNPO法人として活動することになった。

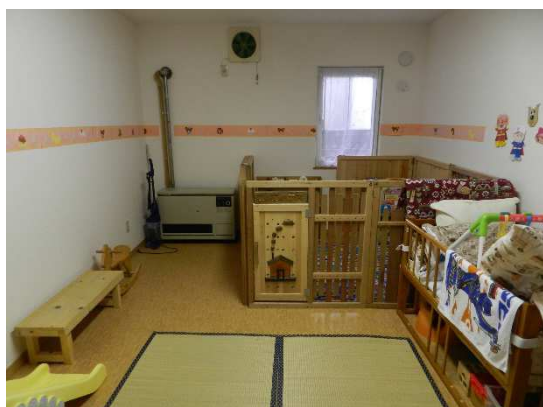
スタッフに30、40代の若い世代が多く、看護師や保健師、保育士などの有資格者が増えたことで、働く場所として賃金を支払えるようにしたいというのも設立の一つの目的だった。総務には2人のスタッフを常勤させている。

運営活動費には、国や道の助成金や利用料金、会費などがある。会員は、それぞれのグループが会員となっている正会員、賛助会員は寄付した人で、昨年6月からは、「る・る・るフレンズ」という制度も設けた。これは一口500円から、会費を支払うと、利用料金

が割引となったり様々な情報が届けられたりする特典がある。これまでは、年間 3000 円の賛助会費を集めていたが、若い母親たちから毎年その額を集めるのは難しいと寄付してもらいやすい金額にした。2014 年現在で会員は 32 人で中には 10 口寄付した人もいるという。

■ 利用者が 10 年で大幅に増加

利用者は、中標津町だけではなく、羅臼町や浜中町などから買い物を兼ねてくる母親たちも多いという。2013 年の 4 月から 2014 年の 3 月まで 1 年間で利用した人は 7641 人。中でも月曜から金曜まで開院している母乳育児相談室を利用する人が圧倒的に多く、1 ヶ月 300 人程が利用しているという。このほか、ゼロ歳から就園前の幼児とその親を対象にわらべ歌やリズム遊びなど音楽を通して親子で遊ぶ「あいあいサロン」、託児サービスを行う「ハートママ」、保護者が赤ちゃんへマッサージすることによって親子の絆を深める「いんふぁんとマッサージ教室」の利用者



託児スペースではぬくもりのある木の遊具がある

も多い。

2004 年のスタート時の利用人数が年間 360 人だったことを考えると、現在の利用者が 10 年で大幅に増えたことがわかる。それは社会的ニーズと、個人事業者やサークル団体などの会が増えたことが背景にある。スタート当初は、会が 5 つしかなかったが、現在は 13 にまで増え、スタッフも 7 人から 35 人になった。

施設内は広いとはいえ、13 もの会がここを利用しているため現在の状況では使える場所が少なく、利用者がこの場所以外で新しい会を始めることも多くなっており、ここで育った母親たちが巣立ち、外で活動の場を広げているケースもある。

「ここから羽ばたいて、活躍している姿を見るとうれしいですし、頑張っていて欲しいなと思いますね」と松實さん。

最近では地元で市民活動やサークル活動している人たちのほか、これからこうした活動を始めたいという人たちが施設を訪れ、運営のノウハウなどを相談しにくるそうで、「市民活動も盛り上げるための一助になれば」と松實さんは意気込んでいる。

■ 課題や社会的状況と向き合いながら活動を継続

今後、企業や町とも連携して子育てサポートを充実させていく考えで、10 年を超えた活動がさらに進化しようとしている。

ただ、実際に企業からオファーがきてもスタッフはフル稼働で、新しい事業を始めるに

は人手不足なのが実状。スタッフを雇うとなると、採算を取るために、利用料金を高く設定しなければならない。しかし、都市部のように利用料金を高く設定しても、人が集まるわけではない。料金を据え置いたままで母親たちへのサポートをしたいという気持ちと、事業を広げて働く場所を提供するため利用料金を値上げしてスタッフを増やしたいという



「あいあいサロン」では、わらべ歌やリズム遊びなど音楽を通して親子でふれあい遊びを楽しむ

もどかしい状況にある。その板挟みの状況の解決が松實さんの課題でもあるという。

さらに、ここまで成長した会の活動も母親たちの働き方の変化によってニーズが少なくなっていく懸念もあるという。

中標津町は、少しずつ人口が増え、出生率も道内3位という珍しい地域。だが「これからはそんなに子供たちが生まれるわけではないので人口は自ずと減っていくでしょう。活動を始めた当初は産休期間で赤ちゃんを産んでから3～4年はお家の中にいるというお母さんたちがお子さんを連れて集まる場所としてここを提供していました。でも今の国の政策では産休を取ったとしても1年で、2年目からは子供を預けて働きに出ていくようになっています。こうした子育て支援も1年間の産休をとっている人たちだけが利用するのがせ

いぜいで、社会的ニーズもこれから変わっていくのではないのでしょうか。そんな中でも1年ごとに地道に活動を続けていこうと思っています」と松實さん。

母親たちを取り巻く環境が変わっていく中でも地域のコミュニティを守る活動を続ける松實さんたちは着実に地元の人びとの意識も変えている。

■ 連絡先

〒086-1054

中標津町東 14 条北 1 丁目

代表 松實 とよ実 (まつみ とよみ)

TEL/FAX 0153-72-3259

Email : rururu@snow.plala.or.jp

URL : <http://www.npo-rururu.net/>